Japanese association of educational psychology

親子関係の評定　－実際の経験と検査用紙上の評定－

松尾香弥子
（お茶の水女子大学大学院）

【研究の目的】親子関係の評定は大まかに分けて、①研究者の客観的な観察によるもの　②被験者が回答する検査用紙等の分析によるもの　の２種類があるが、子どもの親子関係を評定する場合には①が、比較的高年齢の子どもあるいは成人を対象とする場合には②が用いられることが多い。高年齢者（とくに成人）に②が適用される理由としては、親子関係を実際に観察するのは手間がかかること、また、親子関係が特に重要であると考えられる子どもの頃がもう過ぎていて、観察が不可能であること、が考えられる。

②の方法の場合、被験者自身が自分の体験した親子関係について評定するのであり、客観的な親子関係が投影されているかどうかは必ずしも明確ではない。つまり、高年齢者の経験した親子関係の評定では過去を回顧する形式になりがちであり、実際にどのような親子関係であったか、ではなく、自分の経験した親子関係について、今現在、どのように評定しているのか、を測定することになる。そうすると、実際の体験と現在の評定の間には、あるいは何等かのギャップが存在することが考えられる。

本研究では、親子関係の認知についての興味から、このギャップを埋める方途についての模索を試みた。もとよりこのギャップは埋められるものではないが、検査用紙による測定を補う方法を提示できるかもしれない、と考える。

【方法】＜被験者＞都内のある大学の大学生及びその知り合いで、両親の揃っている者。女性７２名、男性６名、不明１名の計７９名。

＜方法＞被験者に、上記の①に準ずる方法と②の方法の両方を行い、両者の相関係数を計算する。本研究では特に親の拒否的態度を取り上げ、これについて両様の評定をしてもらうことにした。

まず①に準ずる方法として、なるべく親の態度についての被験者の判断を含まないような、事実としての認識を測定しようと考えた。そこで、Lanham(1966)に見られる日本人の親の叱り方・態度についての記載を参考に親の拒否的態度を表わすと考えられるいくつかの項目をあげ、そういう事実があった記憶があるかどうかを尋ねることにした。その項目とは、例えば、叱られたときなどに「そんなことをすると、ひとさまに笑われる」「お前をよそへやってしまう」などと言われた記憶があるかどうか、おきざりにして行こうとする、という態度をとられた記憶があるかどうか、など１０項目である。これらの項目について、「記憶がある」と答えれば２点、「あるような気がする」と答えれば１点、「記憶にない」と答えれば０点を当て、合計点を①による事実としての親の拒否的態度の得点と考えることにした。

次に②の方法としては、田研式親子関係診断テストの児童・生徒用の用紙から、拒否的態度を評定する部分を取り出し、言葉遣い等を適切に改めて使用した。このテストでは拒否的態度について、消極的拒否型と積極的拒否型とを設け、それぞれについて、父親と母親を別々に評定してもらう形式である。「あなたが話しかけても『忙しいから』などと言って、相手になってくれない。」などの項目に、「とてもよくあてはまる」場合は２点、「まあ（だいたい）あてはまる」場合は１点、「あてはまらない」場合は０点をつけ、合計得点を求めた。ここでは次の合計得点が出される。ａ父親の消極的拒否型得点、ｂ母親の消極的拒否型得点、ｃ父親の積極的拒否型得点、ｄ母親の積極的拒否型得点、ｅ両親こみの消極的拒否型得点、ｆ両親こみの積極的拒否型得点、ｇ全体の拒否型得点。

【結果】相関係数は以下のように算出された。

①とａ父親の消極的拒否型得点　……　.383
①とｂ母親の消極的拒否型得点　……　.497
①とｃ父親の積極的拒否型得点　……　.230
①とｄ母親の積極的拒否型得点　……　.582
①とｅ両親こみの消極的拒否型得点　……　.493
①とｆ両親こみの積極的拒否型得点　……　.499
①とｇ全体の拒否型得点　……　.549

【考察】実際の体験についての評定と、診断テストの評定との間には、かなり相関があることが示された。特に、母親についての評定で相関係数が高い。これは母親の態度の影響の大きさを示していると考えられる。本研究はいずれの尺度も記憶に基づいている、という制限はあるが、今後さらに検討を加えていきたい。

【引用文献】Lanham, B. B. (1966) The psychological orientation of the mother-child relationship in Japan. *Monumenta Nipponica*. vol 26.

NII-Electronic Library Service